青年学級生の生活記録

若い河

読売新聞社編

若い河

青年学級生の生活記録

1955

読売新聞社編

検印省略

河いわ若

昭和三十年八月三十日　印刷
昭和三十年九月　五日　初版発行

定価一四〇円

編者　読売新聞社
発行者　渡辺智多雄
印刷者　平尾秀吉
東京都新宿区市ヶ谷本村町二七

発行所　読売新聞社
東京都千代田区有楽町
大阪市北区野崎町

（乱丁・落丁のものはお買い求めの書店もしくは本社でおとりかえします）

印刷・新日本印刷株式会社　製本・寿製本所

はしがき

考えれば考えるほど、むずかしい世の中である。

教師や指導者たちは、なにかというと問題解決の学習というが、私たちの生活を見わたしてみても、ちょっとやそっとで解決できそうな問題は、なにひとつない。解決できそうもないからこそ、問題なのである。

そこで、多くの人たちは問題から目をそらしてしまうか、問題をよけて通ろうとする。いくら考えてみたところで、どうにもなるものでないと思えば、苦労してむずかしい問題と取組むことが、ばからしくさえなってくるのだ。

終戦後の混乱のなかで、これからの青年はどう生きていったらいいかを、みんなで考え、みんなで学ぼうと、東北の青年たちの手でつくられた青年学級が、いま青年たちから見はなされようとしている理由のひとつは、こんなところにあるのではないだろうか。

だが、多くの青年たちがものごとを考えようともしないで、ただ時勢におしながされて生きてい

たのでは日本の不幸はいつまでたっても救われない。救われないばかりか、民族の不幸は救いがたいものとなってしまうだろう。

日本の青年のまわりには、むずかしい問題が山のように積まれている。この悪い条件にあふれた社会のなかで、青年がたくましく生きてゆくためには、ひとりびとりの青年がつきあたっている悩みや苦労を、青年の共通の問題として、みんなで考えあい、勇気をもってぶつかってゆくほかないだろう。

読売新聞社が毎年「青年学級生の生活記録」を、百万の青年学級生から募ってきたのも、日本の青年が日常の生活をどのようにとらえ、このきびしい現実とどのように取組んでいったらいいかを、ひとりびとりの青年に考えてもらい、さらにそれを青年全体の問題として考えてもらうためである。

この本に集められた生活記録は、第二回、第三回の応募作品のなかから入選作と佳作十七編を選んだもので、どの作品にも生活と真正面から取組んだ日本の青年の真剣な姿がえがきだされている。

これらの作品のなかから一人でも多くの青年が、日本の青年のうえに重くのしかかっている問題を、自分の問題として考えてもらえればしあわせである。

昭和三十年八月　　読売新聞社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はしがき……一

第一部

屋根ふきは空のま下で……後藤慎一……二

もっと身近かな生活の中に……春日幸……一九

ヒマワリのように……土屋裕子……二六

牛と耕耘機と……長戸光雄……三四

月賦のグローブ……倉持好美……四三

成長へのねがい……大村和子……四九

ニコヨンとともに……三輪啓次郎……五三

酸土は世話ではなおらない……網野広明……五九

第二部

みんな手をつなごう……秋場友次……六九
小さな声が……高橋岩夫……七八
夜道でもわたしは行く……柴崎静枝……八五
大地とともに……斎藤新治郎……九三
新しいめばえ……大坪栄一郎……一〇一
惜しみなく働く……荻島勲……一一〇
下男雑記……井上三郎……一一〇
炭焼きのころ……熊田保市……一二八
おやゆびのタコ……佐藤弘江……一三四

〔付録〕 生活記録を書く人たちのために
道をふみかためる足音……丸岡秀子…一四三
生活記録とその書き方……国分一太郎…一五三

装本　勝本富士雄
カット　手塚一郎

若い河

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一部

〈一九五五年〉

一位

屋根ふきは空のま下で

後藤　慎一

父が死んだ。みんな泣いたが私は泣かない。どうせ、いつかは親と別れるときが来る。親が子より早くこの世を去るのは自然であり、子が親より早く死ぬのは親不孝なのである。こんな出来事は不自然ではないのである……と負惜しみな考えが私の心に波打っていた。

それでいてすごくさびしいのである。世間の人はこんな私を人でなしと言った。しかし、いつまでも嘆いていてはかえって親不孝なのである。それよりもこれから先、どのようにして暮しを立てて行くかを考え、どんなことがあっても生きて行かなければならない、と心に強く誓うことなのである。

私は医者を迎えに行っていて父の死に目にあえなかったが、父は「母を助け弟妹を可愛がってくれ、そうして一人前の人間に育ててくれ」と言ったかもしれない。そうだ、私も一人前になるのだ。それから四日たって妹が生れた。悲しき出産である。これで男三人、女二人の兄弟と母で、一家六人の生計はどこから成り立って行くのだ。

このとき、私は村の中学校を卒業したばかりで、西も東もわからず、疎開の悲しさに田畑一枚もなく、父が無理をして建ててくれた家だけが、私たち一家の暖かい心づけであり、力であった。

石工だった父は毎朝早かった。私にフイゴをふかせながら、よくこんなことを言っていた、「おらが若いとき、米二俵ぐらい楽にせおって歩いたもんだ。仕事なんか二

人前して、夕方早く帰って来るっけ」と昔の自慢話をした。

そうだ、私も働くんだ。なんでもいいからバリバリ働くんだ。そうすりゃ金も取れてみんなを楽にできる。

十八歳の春、農村の特業、屋根ふきとして職人の世界へ飛びこんだのである。父が亡くなってから八年、末の妹はことし学校に入る。私も一人前の金が取れるようになった。けれど、やや半年雪に閉ざされる農村では食って行けるだけの田がないと、冬のあいだ暮しを立てて行くには並大抵なことではない。屋根ふきは夏にかぎった仕事なのである。

収入のきずなを絶ち切られた私は、ある年はワラ仕事の手間賃で、また土工としてソリ引きに出て細々とした収入で家計をつないでいた。ことしに入ってから郵便局へ期節要員として雇われることになり、毎日一軒一軒、明るい気持で訪問して歩く。私はうれしい。ソデにレースの入った官服をきて歩くのがうれしいのではない。夏も、そうして冬も、私に仕事ができるようになったからである。

私は暇を見ては青級へ通った。もう四年になり、生徒自治会の会長を勤めてから二年になる。世間は「職人が会長か。青級に通っても一文にもなりゃしない」と強く批判する。なるほど勉強したって収入などありゃしないが、おもしろく講義を聞いたり、心ゆくまま議論をし合った次の日など、愉快に仕事ができた。だから直接、収入はないが人に見えない心の収入があるのだ。したがって時間的に余裕を見出せるようになり、他部への繰り合せができるようになったのである。

父の死後、ここまでたどりつくには、毎日生活に追いつめられた苦痛な日がつづいた。職人になったからといって初めから金は取れず、右にも左にも動きのとれなくなった私たち一家は、生活扶助を受けるようになったのである。この生活扶助は社会の険悪な目を引き、冷たい風は常に吹きまくった。

九歳のときから子守りとして他家に奉公したという母は、農業の技術すらおぼつかなく、無理をして身体を痛めるぐらいが関の山だった。母は毎日、焦燥と沈痛のうちに明け暮れた。「困ったなあ、あすの米ないぜは」と言われるたびに、「おらいの家にも田があったらなあ」と愚痴をこぼし、「また米借りったらなぜなこと言わに行か

れんべ」と思い、「そのときなぜ言うたいかべか」と考えに考え、しぶしぶ米袋をかついで父母の実家へ足を向けるのだった。夜学に通う同僚と行きあって「どさ行く」と聞かれても「湯さ入りいって来る」としか言えなかった悲しい事実である。俗にいう一升買いの苦しさである。

村の農協から配給は受けられることになってはいたが、金がまとまらないので買いに行くことができないのだ。闇米を買ったと言われるかもしれないが、配給を受けると米一斗で約百円はよけい取られた。そうするとその百円でしょう油一升が買えるのだ。

「貧乏人は麦を食え」と大臣が言った。米もろくろく食えないのに麦だけ食っていたら、身体もこわれてしまうだろう。したがって着物も買えるわけがない。ぼろぼろのまま、弟妹らは学校に通った。遊んでくれる友達もなくなり、事実、こじき呼ばわりをされて泣きながら帰って来ることもあり、そのたびに私は「ようし、いまに見ろ、きっと一人前になって見返してやる」と奮起せずにはいられなかった。

母はすべてに気を配り、たまには魚肉等の食事のときは、なるべくにおいをさせないようにした。こんなことを知らない世間の人は「もらっているくせにうまい物ばかり食っている」と口うるさく言った。

こんな苦しみのうちにも母は、ひたすらに私たちの成長を一日も早くと願っていた。私は俳句が好きだった。高い屋根の上で真黒になりながらも、稲刈を手伝いしながらも、見たこと、感じたことをそのまま読み、ときおり青級に持ち寄って、みんな俳人になったかのような気持で批評しあい楽しんだ。

一日の仕事をすませ、床についてから生徒自治会の原紙を切ったり、詩を読んだり、綿のはみ出たふとんをきて、本の上にうつぶせになったまま朝まで知らずにいるときもある。机に向かっての勉学も、燃料や電灯のかげんでできず、態度こそ悪いが、勉学の心は学校に行っている者と変らないのだ。

物がなくとも心にひもじさをあたえないのが教育であり、学校教育も社会教育もその精神には変りない。そこには教育者もあり指導者もいるが、やはり個々の忍耐と努力によってその成果がえられるのである。とくに社会教育は私たち不運な者のために作られ、多くの金がつかわれている。私たちはこれを十分に活用することによっ

て、その恩恵に浴しえられるのである。どこへ行っても白眼視される青級は、若い男女の享楽の場としか考えられないのも、私たちの活動が十分でないからである。

私は青級生のなかで一番貧乏だ。それで生徒会会長の席にあることは、なにかにつけてうまくなかった。時間的に余裕がないため生徒会の会合に出席できないし、出席ができて議論をたたかわせても、相手の気をそらさないようにと、「自分はいま、みんなの家からやっかいになっているのだ」ということを考えて、ぐっと虫をころしていなければならないつらさだった。職人という立場にあって会長という役職、それに生活苦、これで日常における自分のやることがつりあっているのか？　と疑問さえわいて来るしまつだ。

会を、いや袖崎青級を代表して郡の集会などにのぞむときなど、外出着を持たないので、従兄からもらった菜葉服をきて出席した。背広姿の青年の集まるなかに、白米にアラがまざったようなかっこうであった。あれが袖崎の会長かと言われたくなかったので、なるべく多く発言した。これだけはみとめてくれた。

ニュー・スタイル八頭身とかヘップバーン型とか、はんとうにあかぬけした世の中になったものである。「会長どうした。だらしないぞ」と責任を追及されるたびに「いっそのことやめてしまおうか」となんど思ったかしれない。

しかし、ここで終ったら私は環境に負けたことになるのである。私はなにごともじいっとがまんした。

青級を娯楽の場としか考えない生徒があり、したがって学習も決して満足できるようなものではなく、まるで山ザルの寄りたかったような学習の日が毎日である。ぜんぜん講義を聞いていないで、後になってから「いまなにをしていたのか」と隣りの人に聞いているしまつだ。あきれた話である。「なにか質問はないか」と言われてはじめて先生の顔を見る。そんな生徒にかぎって机の上に『平凡』とか『明星』がのっているのである。まじめな生徒はもう二度と来ないほうがよいと愚痴をこぼすのも無理はなかった。

いつも、どうすれば青級の活動の活発化をはかれるか、という問題で日が経っていった。生徒会の反省と明日の運営のことなどを考えていて、仕事中、師匠から何回しかられたかわからない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com